

(研究ノート)

自閉症スペクトラム障害と注意欠如多動性障害の 両方の特徴を示した男性のWAIS-III

武内 智弥 境 忠宏

キーワード

発達障害 自閉症スペクトラム障害 注意欠如多動性障害 心理検査 WAIS-III

I. はじめに

発達障害についてDSM-5 (American Psychiatric Association, 2013/2014) によれば、自閉症スペクトラム障害 (ASD) 者は、社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥、行動・興味・活動の限定された反復の様式といった特徴が診断基準となっており、注意欠如・多動性障害 (以下AD/HD) は、不注意および/または多動性-衝動性の持続的な様式といった特徴が診断基準となっている。そして近年、発達障害者が抱える困難とその援助についての報告 (森崎、2013; 高貝、2014)、また、鑑別や心理アセスメントに関する報告は、以下のように多くされている。

発達障害児者のアセスメントには、知的能力や関心の偏り、注意の働かせ方等を捉えやすいWechsler式の検査が用いられることが多く、ASD・AD/HD児者のプロフィールについて一定の研究結果を得ている (金井ら、2012)。例えばASD児者について一貫して指摘される特徴は、〈理解〉の低さと、〈積木模様〉の高さ (藤田ら、2011) である。その他にも〈類似〉〈数唱〉の高さが報告され、社会性の障害やASD者の中枢性統合の弱さ (Frith, 2008/2012) 等の特徴の顕れとされている。

一方、AD/HD児者に特徴的なものとしては、SCADプロフィール (記号探し・符号・算数・数唱が低くなるもの) や、ACIDプロフィール (算数・符号・知識・数唱が低くなるもの) が挙げられている (藤田ら、2011)。これらは強く集中力を要する課題とされ、不注意や衝動性の高いAD/HD者の特徴と一致するものである。

しかし、これらの典型例は少なく“指標得点や下位検査の得点プロフィールのみでは、ASDやADHDの特性を測定しきれない” (飯利・岡田、2014)、“数量的分析の限界” (糸井、2014) とされる。このように発達障害者の能力バランスや特徴は非常にさまざまであり (前田・鹿島、2005)、疾患としての均質性に欠けるという指摘すらある (牛島、2012)。Rorschach-Testにおいても、数量的な分析や通常用いられるスコアに発達障害らしさは反映されにくいとされ (大場ら、2013)、質的な特徴と合わせて報告が行われている (内田・辻井、2002; 北村ら、2014)。

たけうち ともや：淑徳大学 通信教育部
さかい ただひろ：淑徳大学 通信教育部・淑徳巣鴨中学高等学校

Rorschach-Testの質的分析は一般に必須とされるが、構造度の高いWechsler式知能検査においても、質的分析を行うことでその人の特徴はより明確になると思われる。実際、WAISの質的な分析について「刺激-反応」という視点（糸井、2013）や、反応内容への着目（黒田ら、2007）が言われている。

そして従来の診断・統計マニュアルのDSM-IV-TR（American Psychiatric Association, 2000/2001）は“過活動と不注意の症状は自閉性障害によくみられるが、自閉性障害がある場合、注意欠陥／多動性障害の診断はつけられない”としていたが、DSM-5（American Psychiatric Association, 2013/2014）では“注意欠如・多動症と自閉スペクトラム症の両方の診断基準を満たす場合、両方の診断が与えられるべき”と並存を認めるようになった。

本稿では、これまでには並存が認められなかったため、あまり報告が見当たらないASDとAD/HDの両方の特徴を有すると判断された20代男性の心理検査を経験したため、Wechsler式の知能検査の結果を中心に報告する。なお、結果の解釈において、ひとつひとつの下位検査について質的な分析を試みる。

II. 事例概要

【クライアント（以下CIと記載）】 Aさん 20代 男性 会社員

【主訴（問診票より）】 何をするにもおっくう、仕事の手が止まりがちになった。

【生活歴】 B地方にて、同胞2名中第1子長男として出生。検診で異常は指摘されなかったが、幼稚園時代から友人はおらず一人であることが多かった。小中は地元の学校へ通い、高校はサポート校であった。その後は、大学（電気科）に進学し4年で卒業。現在の会社に就職し数年勤めている。

【家族】 父親はAが7歳の時に突然死している（詳細不明）。母親（56歳）は専業主婦だったが、現在はパートをしている。妹（Aより2歳年下）は、てんかんと抑うつで通院しており無職である。家族図は図1の通りである。

【現病歴】 Aの発言通りに記載する際に「 」を用いる

昔は「問題児」だった。小学生の頃より授業中に立ち歩いたり、忘れ物をすることが多く、人が傷つくことをよく言っていた。中学生時代も同様によく不良に絡まれた。教師の勧めで精神科を受診し発達障害疑いでMethylphenidate等を処方されるが、薬効は感じられなかった。

高校時代も忘れ物は多かった。好きな女子が他の男子と一緒にいるのをみてムシャクシャし、

二人が付き合えばいいと黒板に書く等、衝動的に想いを黒板に書くことがあった。大学でもなお黒板に友人や恋人がいないことを書いていた。Aは「自分はきちがいと思われることをたくさんやるタイプ」と表現している。またイライラすると独り言でブツブツと文句を言い続けることは現在も続いている。

大学卒業後のX-3年、現在の会社にプログラマーとして就職。理解の遅いAを上司がバカにするようになった。それがストレスで仕事に何時間もインターネットをやるようになった。X-2年秋、仕事に少し横になりたいと、倉庫

2

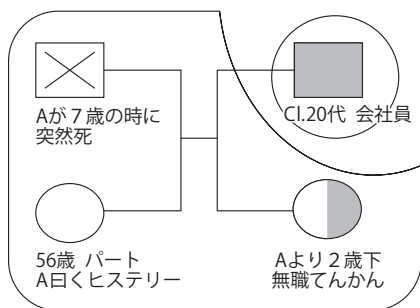


図1. ジェノグラム

で寝ていたことが発覚し問題となり、謹慎処分となった。

X年春、C地方の支店に異動となり、表計算ソフトで、ただコピー & ペイストをする仕事になる。Aの仕事の進みは遅く、指示も忘れがちであるため、よく叱責され、以前にまして部屋の片付けができなくなった。X年7月、やる気がでずうつっぽいや感じ、筆者が勤務していた精神科のD医院を自ら受診した。

最近の趣味はボーカロイドでの作曲で、やり始めると帰宅後に何時間も取り組む。自分の作った音楽を聴いている時には気分が落ち着く感じがする。

初診後、診断補助のため医師より心理検査の依頼があった。Aは「カッとなった時でも冷静に考えられるようになりたい」と受検に同意。なおWAIS-Ⅲの他にRorschach-Test等、複数の心理検査を実施した。

【Aの様子】 疎通性は良好であるが視線はあまり合わない。そわそわとしていて常にからだのどこかを動かしている。WAIS-Ⅲは「2年前に受検した」と話すが、別の話題へ移っても「さっきのは〇年前でした」と何度も訂正した。前回の結果は〈絵画配列〉ができず人の感情を読むのが苦手、アスペルガー症候群疑いと言われた、と語った。

Ⅲ. 各心理検査について

実施した心理検査の概略について以下に記載する。その際、後述する倫理的な配慮の必要性から、これらの説明は一般的に公開されている内容を超えないように記載している。

【WAIS-Ⅲ知能検査】 D. Wechslerが1939年に作成した知能検査の第3版の日本版である。適用範囲は16歳～89歳で、個別実施で行われる。14の下位検査を有し、さまざまな種類の課題で構成されている。結果は言語性IQ (VIQ)、動作性IQ (PIQ)、全検査IQ (FIQ) の3つのIQに加え、「言語理解 (VC)」「知覚統合 (PO)」「作動記憶 (WM)」「処理速度 (PS)」の4つの群指数も測定することができる。

【SCT 精研式 文章完成法テスト 高校・成人用】 この検査はパーソナリティ検査の中でも投射法に分類され、“私はよく_____”などの短い刺激文に続く短文を自由に書くことを求めるものである。刺激文は、Part I・IIを通じて、計60ある。Aにはボールペンでの記入を求め、修正箇所は二重線で消すように依頼した。

【P-Fスタディ 成人用】 Picture Frustration Studyの略で、1948年にS. Rosenzweigが考案した投射法のパーソナリティ検査である。冊子の中には24の欲求不満場面が絵で示されており、それに対して、空欄になっている吹き出しに台詞や考えを自由に書くことを求めるものである。

【Rorschach Test】 代表的な投射法のパーソナリティ検査でH. Rorschachが1921年に発表した。インクのしみから偶然に創り出されたとされる10枚の図版について、それが何に見えたのかを訊き、その人のパーソナリティや世界観をアセスメントするものである。

3

Ⅳ. WAIS-Ⅲ各下位検査の反応と集計結果

以下に各下位検査における反応を記載するが、検査問題の公開に関する倫理的配慮の必要性から、本稿ではWISC-4のマニュアル (Wechsler・日本版WISC-IV刊行委員会、2010) の取り扱いに関する注意事項等を鑑みて、下位検査の説明や問題・正答に関する記載は最少にした。

【検査中の態度と反応の特徴】 時間通りに来院。協力的に取り組んだ。回答しながら身体をゆらゆらとさせたり指をいじっており、様子は落ち着かなかつた。また、検査に取り組んでいると一ヶ

点はまばらで、最後に正答したのは問題27（2点）であった。

考え込んだ後に回答して2点を得る問題がいくつかあった。回答していると「～で、はい、～です。はいはい。」と「はい」を忙しなく多用していた。回答は数えるとほとんどが15文字程度だった。その他、特徴的だったのは問題7（失言）にて「他人に自分が悪く思われるようなことばかり言うてしまうこと」という回答。また問題16（うららか）は0点だった。

- 【3. 符号】（評価点：10）「これは楽しい」と前のめりに取り組む。説明が終わる前に始めようとするので、Tr.が制止しながら教示した。

課題中、本人は勢いよく始めたが、視線の動きを見ると、ほぼ毎回、刺激を確認していた。手は次へ次へと急いで動こうとしているが、回答は進まず、後半はペースが落ちていた。Aが書いたものを見ると、比較的丁寧な記載だが、時々枠から大きくはみ出していた。誤答はなし。

補助問題は1のみ実施。全9個の符号の内、8個の符号を記し、6個の符号が正答。3に対応する符号は左右反転して記載していた。

- 【4. 類似】（評価点：13）開始問題から問題10まで2点で正答。その後は2点と1点が入り混じるが、0点となったのは問題18のみで、最終問題まで実施。

多くは「〇〇です」と一言で回答したが、問題16以降はTr.よりQuery（以下Q）となることが増え回答も若干長くなった。問題17では「習性」か「習慣」か言葉の選択を迷っていた。またTr.よりQを出しても同じ回答の繰り返しで、得点は増えなかった（問題16・17・18）。

- 【5. 積木模様】（評価点：13）全問正答。回答速度も速く、多くの割増し得点得た。手先で積木を組み合わせながら、次の箇所へ視点を送って考えられていた。また作る順番も各問題の特徴的な部分に合わせられていた。ただし、問題11では真ん中の横一列から作り始める等、柄に囚われていない作り方も見られた。加えて問題10・13で、反応時間がとりわけ遅れたり戸惑う様子はなかった。

- 【6. 算数】（評価点：12）誤答を示したのは3問だけで、残りは単位まで正確に述べた。しかし問題文を聞き返すことは多く（問題10・12・16・17・19・21）、ほとんどは問題呈示後すぐに聞き返した。問題17以降の反応時間による割増得点は得られていない。

この下位検査の最中には常に指いじりをしていた。

- 【7. 行列推理】（評価点：13）誤答したのは問題18・23・26の3問のみ。問題23・26は1分以上考えるが「パス」した。

静かに一点を見つめるかのように動かずに考え、問題12を過ぎた辺りから、1問1問、かなり長い時間をかけた。回答後すぐに言い直した問題が3問（問題9・18・21）あった。

- 【8. 数唱】（評価点：15）順唱は全問正答、逆唱は6桁と7桁で1問ずつ誤答し、8桁は覚えきれなかった。

Tr.が問題を言い終わると素早く回答する。取り組みについて訊くと「普通に音で覚えました」（順唱）、「1回数字を覚えてやりました」（逆唱）と、Aの中では単純に回答しただけだった様子。

- 【9. 知識】（評価点：10）開始問題では「〇ヶ月」の質問に「〇日」とケアレミスをして、リバーズするが問題16（グラハム・ベル）までは順調に正答。その後は、問題19（近代オリンピック）、問題22（広島に原子爆弾）、問題24（富嶽三十六景）を正答した。0点だった問題の多く（問題17・21・23・26・27）は質問後、間髪入れずに「パスです」と何も回答しなかった。問題11・18も誤答で、歴史と生物に関する問題は0点だが、日本史の問題（問題22・24）では得点を得た。

- 【10. 絵画配列】（評価点：6）問題7まで正答を示した。その後は総てOTとなるが、さらに数

十秒あれば正解と同じ並びを作れた。取り組み方は、まず全体を見渡すが、かじりつくようにカードに近づくため、頭を大きく動かして、あっちこっち忙しくしていた。また並び替え後も、指さしで点検していて時間を要した。

いくつかの問題で配列完成後にストーリー内容を訊くと、概略は理解しているが、人物の情緒に関する表現はたんぱくなものが多かった。例えば問7「(前略) 子ども達が取り合いになって、それをおじさんがなだめて、それで最後に子ども達が仲良くなって(後略)」。

その他、問題4では「(前略) 開けようとしたんだけど、開かないからイライラして立ち去ったら(後略)」と説明した。

- 【11. 理解】(評価点：12) 開始問題から4問は2点で正答するが、問題8以降は1点と0点の回答が続き、2点をとったのは問題12(免許を取得)だけである。開始問題では、すぐに問題文を聞き返すことがあったが、それ以降はなかった。

特徴的な回答は、問題9(歴史を学ぶ意味)にて「こういうことが起こると人々はどう思うか どういう行動をするのか学ぶため」というもの。

- 【12. 記号探し】(評価点：4) 全体の2分の1ほど回答し、誤答は無かった。せかせかと顔や手を動かすが、判断にかなりの時間を要した。視線が何度も左右へ動いており、何度も確認していることが窺えた。

本人が「ある」や「ない」につけた丸は大きく、前の問題のスペースにまで、はみ出すものもあれば、小さいものもあった。

- 【13. 語音整理】(評価点：11) 問題が呈示されると、少し間を空けて一気に回答を述べていた。第1・第2ブロックは第1系列で正答。第3ブロックは5桁で1問、6桁で3問誤答し、0点であった。5桁の際には仮名を並び替え忘れ、6桁の際には数字が一つ抜けていたり、別の数字を言う等の誤答の仕方であった。また6桁の第2系列では外で音がなってしまう、全く回答せず「パス」とした。

- 【14. 組合せ】(評価点：11) 全問正答だが問題4以降は検討に時間を要し、割増得点がほとんど得られなかった。

問題3では胴体を横長にした状態で長く検討したが、一通り試行錯誤し胴体を縦長にできるとすぐに完成まで作りあげた。問題4ではペア部分はすぐに合わせられたが、その後一度置いた窓の位置を変えられず、時間がかかった。問題5では、手当たり次第に組み合わせ、1箇所合う部分が見つかる、それを基にしてパーツを増やしていった。なお問題1・2では人の顔、人の目から手をつけていた。

- 【終了後の感想】 まず「数字を覚えるやつはすぐに忘れちゃった」(数唱)と述べ、やりやすかった課題は「パズルのは前回全然できなかった」(組合せ)、一度経験しているため「マンガの並び替えは分かるようになった」(絵画配列)と振り返った。

感想は「向こうの話(別の診察室の音)が気になってやりづらかった」。

6

V. その他の心理検査の結果

WAIS-IIIの他に実施したSCT、P-Fスタディ、Rorschach-Testについては特徴的な点を抜粋し、以下に簡潔に記載する。

- 【SCT】 ほとんどの項目が結論を一言で表現するような記載で、WAIS-IIIでの説明力とのギャップがある。多くのASD者のように自身の感覚を活かしての表現が苦手だと窺えた。

- 【P-Fスタディ】 書き直した記載がいくつかあり、それ見ると刺激文の数字を読み間違える等、衝

動的に飛びつき、修正を要したと考えられた。WAIS-Ⅲにおいても飛びついて誤答となることがあり、一致している。そしてASD者がU反応を示しやすい(池島ら、2014)とされるように、Aも場面23にて状況を捉え間違えたと思われるU反応を示した。

【Rorschach Test】 知覚的にはよくある反応でも、内的に動かされた部分のみに言及して全体を見ていない反応や、Ⅶカードで「うさぎの耳の生えた女の人」と位置関係による作話と思われる反応を示した。加えて「三角帽子と言ったら魔法使い」等のAなりの論理での説明もみられた。その他W M±H P(片口法)のようにきちんとフォーカスされた反応を示したかと思うと、「なんとなしに見えただけ」とほとんど説明できない反応があり、関与にムラが感じられた。AD/HD者の部分的なフォーカスやASD者の作話W型の反応(北村ら、2014)等が窺えた。

VI. 考察

1. プロフィールの分析

まず本ケースのプロフィールを検討する。VIQとPIQのディスクレパンシーは、多くのASD者が示すように(金井ら、2012)VIQが高かった。

次に、先述のASD者の特徴と比べると、〈理解〉の低さには当てはまらないが、〈積木模様〉〈数唱〉〈類似〉の高さには概ね当てはまる。〈積木模様〉は柄に囚われない中枢性統合の弱さが窺え、類似や数唱は抽象的な思考をとりやすいことや、一点に集中できれば能力を発揮しやすいことと関係すると思われる。

またAD/HDの特徴とされるプロフィールには、ほとんど当てはまらなかった。

2. 本ケースにおけるASDらしさ

本ケースにおいてASDの障害特性が、どう検査に顕れているかについて、以下に質的な検討を行う。本検査から考えられたものは、以下の点である。

【チェーンナップに時間がかかる】 Aは自分なりのペースでない場合にはうまく力を発揮できないようで、課題ごとに新しい判断基準を取り込む必要がある場合には非常に時間がかかる。〈符号〉のような単純作業では年齢相応に素早くできる力はあるが、問題ごとにチェックの視点を入れ替える必要がある〈記号探し〉では判断に時間を要して作業が進まなかった。加えて、課題ごとにパターンを読み解く必要がある〈行列推理〉でも時間がかかった。また〈組合せ〉でも、こうと思いつくと徹底的な試行錯誤をしないと変更が利ないところも、彼の頑なな部分と思われる。黒田ら(2007)の“思いつくと切り替えができない”とする内容と共通する点と言える。

【大雑把で自分のことが切り離せない言語表現】 言語表現は大雑把な印象を受ける。〈単語〉〈理解〉では1点の回答が多く、ニュアンスとしては伝わるが説明が足りなかったり、あまりに具体的すぎたりした。また、Aにとって気になることを刺激される内容だと、一般的なこととして回答できず、自分のことと切り離せないことがあった。これらは〈単語〉の問題7(失言)や〈理解〉の問題9(歴史を学ぶ意味)等、Aが困難を感じている内容の場合に、非常にAの視点にひきつけられた回答になっていると考えられた。

【正答のバラツキ】 〈絵画完成〉にて誤答が続いてからも、生物関係のものは正答したり、〈単語・理解・知識〉では、回答にバラツキがみられ正誤が一定しなかったりした。これらは黒田ら(2007)の“理解している単語に偏りが見られる”と通じている。

また、似た能力を必要とされる課題であっても、〈数唱〉のように単純な集中力を自分のペースで発揮することはできても、〈語音整理〉のように注意の分配や構えの切り替えが必要な場合

には、注意集中のパフォーマンスが大きく低下した。先のチューンナップについての考察も含めて、本人の構えによってパフォーマンスが変化するという指摘（糸井、2013）と一致している。**【コミュニケーションのぎごちなさ】** 検査全体の中で一番最初の問題（〈絵画完成〉の問題6）における、一方的な回答の仕方や、回答中に見られたチック様の「はい」の多用は、コミュニケーション上の硬さや違和感を感じるものであった。

3. 本ケースにおけるAD/HDらしさ

AD/HDらしさについてのパーソナリティ検査や知能検査の報告は少ない。成人期のAD/HDでは不注意の症状が中心になるとされ（山縣・岩波、2013）、WAIS-IIIにおいてAも以下のような注意にまつわるいくつかの困難を示した。

【注意の狭さと注意の統制の難しさ】 注意集中の能力自体は〈数唱〉が評価点15になるほどに備わっている。しかし、それをうまく働かせることが困難な場面が見られた。

まず、注意の範囲は狭く一点に集中させる用い方が主であるようだった。〈絵画完成・絵画配列・行列推理〉で、刺激に過度に顔を近づけたり一ヶ所を見つめて考えすぎて、全体を捉えづらくしているように思われた。それゆえに、全体を捉える必要がある作業には時間があることが窺える。例えば〈絵画配列〉で正答のように作るまで制限時間よりも数十秒要した。

また、〈語音整列〉〈算数〉では〈数唱〉の結果から期待されるほどのパフォーマンスは見られず、ケアレスミスが増えてしまい、判断や操作等の処理が加わると、リソースをとられてしまい情報を保ちきれないことが窺える。注意の分配が苦手なのだと考えられる。

加えて〈理解〉の開始時、何かに気をとられていたことや、「外の音が気になった」との感想、〈算数〉での聞き返しの多さ等は、注意が、外的な刺激にひきつけられやすく、目の前のものに向き続けにくいものと思われる。

【衝動的な反応】 いくらか衝動性を窺える反応もみられた。例えば〈知識〉にて、問われている単位を間違えたケアレスミスをおかしたり、〈符号〉で教示中にやり始めそうになることがあった。自分の中で“これ”と決めたものに対して、飛びつくような衝動的な特徴が窺える。

4. Aの訴えについて

Aの知的能力面について、最大の特徴は、フォーカスの狭さやAの柔軟性の乏しさのために、注意・集中を発揮しづらいことであると考えられる。課題が単純で一定である場合には高いパフォーマンスを発揮できるが、局所に注目しがちで柔軟性に乏しいために応用が利かないと考えられる。Aが目の前の作業に自分を合わせるのには、時間も労力もさかれ、集中がとぎれたり時間がかかったりして、パフォーマンスが上がらないことが推測できる。さらにAのコミュニケーションのぎごちなさから、職場では寛容に捉えてはもらえず、Aの頑張りの想いと裏腹に、やる気がない等と叱責されてしまう場面が推測できる。そうしてやる気が出なかったり、オーバーフロー気味になって、いろいろなことに手がつかない状態へなっていたものと思われる。それによって部屋の片付けが出来なくなったり、うつっぽくなったと感じ、受診に至ったものと推察できる。

ただ、Aは要請に応えようとして自分で試行錯誤でき、かつ、問題意識も有するため、適度な課題が与えられれば、自分なりに消化しようと努力することは可能と思われた。

またAの訴えを検討すると、感情の読み取りは、対人関係という多くの要素を含んだ場面全体を考え・捉えるのに時間を要するため、展開に合わせて理解しきれないことが大きいと考えられる。またWAISの結果から示唆されるのは、気になることや自分のことと関連づけずに、物事に関わり

判断できるようになることで、よりよく自身をコントロールできるようになると考えられ、この点は援助の指針となりうると考えられた。

5. おわりに

既述のようにプロフィール上では拾いきれなかった特徴について、質的な検討を行うことでより具体的に感じ取ることができ、それにより援助の手立てまで検討がしやすくなったと思われる。

さて、医療における鑑別という視点から言えば、何かの指標によってその障害か否かが判断できることが重要である。しかし、“発達障害”があっても、全く同じ人は誰ひとりとしていないというのは、障害の有無に関わらず、ひととして当然のことと思われる。近年の、障害をスペクトラムとして捉える流れを鑑みれば、障害の特有の特徴を拾いづらいつつというのは、なお当然のことと考えられる。

それゆえ、その多様さを感じとりつつも、彼らの特徴や困難さを理解でき、本人に必要な心理的な援助や方針を見出し、検査への反応についての質的な検討は必須であると考えられる。精神医学的な障害や症状の認知的・心理的側面を理解し、心理検査のどういう部分にどのように顕れるのかについて、実感をもって検討できるようにこれからも研鑽を積んでいきたい。

〈付記〉本ケースをまとめることを激励くださった比賀雅行先生（順天堂大学医学部精神医学教室）、多くの調整をしてくださった、横山智美主任（晴心会比賀クリニック）、そして、さまざまにわがまを申し上げたにも拘らず、武内を一人の臨床家として扱ってくださった比賀晴美先生（晴心会比賀クリニック）に、こころより御礼申し上げます。

※本稿執筆に当たって、事例のご本人には、事例論文の形で心理検査を振り返りたい旨を口頭によって説明した後、書面による同意を得ているが、生活史等の記述は最低限に留め、検査結果に差し支えない程度に改変した。

文献

（文献挙示は、一般社団法人日本心理臨床学会の「心理臨床学研究」の方式に準じている）

American Psychiatric Association (2000). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders fourth edition text revision. Amer Psychiatric Pub. 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸（監訳）（2001）. DSM-IV-TR精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院.

American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders fifth edition DSM-5. Amer Psychiatric Pub. 日本精神神経学会（監修）（2014）. DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院.

Frith, Uta. (2008). Autism: A Very Short Introduction. Oxford Univ Pr. 神尾陽子（監訳）（2012）. ウタ・フリスの自閉症入門—その世界を理解するために—. 中央法規出版.

藤田和弘・前川久男・大六一志・山中克夫（2011）. 日本版WAIS-Ⅲの解釈事例と臨床研究. 日本文化科学社.

飯利知恵子・岡田智（2014）. 自閉症スペクトラム障害のある子どものADHD傾向の有無によるWISC-IV認知プロフィールの特徴. 北海道大学 子ども発達臨床研究, 5, 31-34.

池島静佳・篠竹利和・高橋道子・北村麻紀子・千葉ちよ・前田貴記（2014）. 高機能広汎性発達障害におけるP-Fスタディ（成人用）の特徴, 心理臨床学研究, 32（1）, 137-143.

- 糸井岳史 (2013). 発達障害特性を持つ事例のWAIS-III解釈方略. *ロールシャッハ法研究*, **17**, 17-20.
- 糸井岳史 (2014). 青年期・成人期の発達障害への心理アセスメントー知能検査の使い方を中心にー. *広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要*, **13**, 3-12.
- 金井智恵子・谷将之・橋本龍一郎・岩波明・加藤進昌 (2012). WAIS-IIIに基づく高機能広汎性発達障害の認知プロフィール. *臨床精神医学*, **41** (12), 1757-1765.
- 北村麻紀子・高橋道子・篠竹利和・千葉ちよ・池島静佳・前田貴記 (2014). 自閉症スペクトラム障害のロールシャッハ・テストの特徴ー部分反応が多い3事例ー. *ロールシャッハ法研究*, **18**, 1-9.
- 黒田美保・吉田友子・内山登紀夫・北沢香織・飯塚直美 (2007). 広汎性発達障害臨床におけるWISC-III活用の新たな試み. *児童青年期精神医学とその近接領域*, **48**, 48-60.
- 前田貴記・鹿島晴雄 (2005). 広汎性発達障害のロールシャッハ・テストー統合失調症との鑑別. *Schizophrenia Frontier*, **6** (3), 199-204.
- 森崎美奈子 (2013). 発達障害と職場適応. *産業ストレス研究*, **20**, 179-181.
- 大場いずみ・明蕪光宣部・村松朋子 (2013). 発達障害のアセスメントにおけるロールシャッハ・テストの可能性 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌, **17** (1), 4-28.
- 高貝就 (2014). ASDの新たな概念. 森則夫・杉山登志郎 (編) *神経発達障害のすべて*, 日本評論社, pp.50-55.
- 内田裕之・辻井正次 (2002). 高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応内容 (1): 1 図版の特性との関連. *中京大学社会学部紀要*, **17** (1), 95-111.
- 牛島洋景 (2012). 発達障害の神経心理学的特性; その評価の意義を中心に. *Phama Medica*, **30** (4), 25-27.
- Wechsler, D.・日本版WISC-IV刊行委員会訳編 (2010). *日本版WISC-IV実施・採点マニュアル*. 日本文化科学社.
- 山縣文・岩波明 (2013). 成人期ADHDの診断. *脳21*, **16** (2), 203-208.

(受理 平成27年9月4日)